

国士館大学教授

野木大義

柴田徳次郎

闘魂の士

柴田徳次郎伝

国士館創立者

田中健介著

はじめに

国士館大学武道德育研究所教授 野木 大義

「天外天」という言葉がある。

天より高い天とも、天をも図抜ける秀でた存在とも意識できる称賛の言である。

私にとって、師・柴田徳次郎とはまさしく天外天の人であった。

柴田徳次郎は、現在の国士館大学の創立者として知られるが、柴田の知行合一を貫徹した国士としての人生、国士館大学の源流である私塾国士館義塾創設までの想像を絶する艱難辛苦については、いまだ世人の多くにその事実は知らされていないだろう。

柴田徳次郎の歩んだ激烈な闘魂の道程については本文に詳述をお任せするとして、ここでは僭越ながら柴田の最後の弟子という幸運に恵まれた私の、大恩ある師についての所感をもって本書の序文に替えさせて頂くことを、読者諸氏にはお許し願いたい。

自戒を込めて付言するならば、現在の学校教育とは、概ね消費主義礼賛社会に適応して生活できる人間を生産するための方策を、洗脳のごとく詰め込むような「テキスト文化」のコピーである。

「テキスト文化」とは未熟な私の造語ではあるけれども、そこに精神や人心がなくても、それさえ暗記しておけば処世に差し障りなく、つまりは前例に従い身のほどを知れば人並みの暮らしがたてられるだろうという、甚だ無責任な楽観主義ともいえる。

さて、現状の日本はいえ御承知の通りで、大学を卒業したところで糊口くちすきすら絶たれるような、庶民にとって不自由極まりない社会が続いて久しい。為政者が唱える改革どころか、人々を貨幣の獲得に狂奔させる競争市場主義や消費礼賛社会は一種の脅迫観念となって社会を硬直化させている。

戦後の日本が経済の肥大化に比例して招いた精神の貧困と教育の形骸化は、いまや日本人と日本を歴史上でもっとも深刻な危機

に直面させたといってもいいだろう。

「こんなとき、師。柴田徳次郎なら、なにを考えどう動いたろうか」と至孝しこれが常日頃から私の行動律となる。師は私にとって、正に大きな精神的支柱であるからなのだ。

弛緩した社会のなかで、天外天の人である柴田の言動に倣って生きようとすることは、世の常識や前例といったもののとの闘いを余儀なくされる。

そんなときに私は、柴田先生が胸中にたぎらせ続けた闘魂が発した命の声を聴き取ろうとしてきたような気がする。

柴田徳次郎の闘魂とは、たとえば政党政治の政争を典型とするような、対立構図に敵をおいての単純な衝突に挑む支配的な野心とは違うものだ。

それは、文明開化に浮かれながら道を誤ろうとしていた日本人に、自らは継ぎ接ぎボロ着、針金で縫いつけた破れ靴など意に介さず、日本の精神文化の重さと呼びかけ続けた、宗教的とさえいえる献身的な闘魂であったのだ。

それでいて、柴田先生には自己犠牲という観念がなかった。

柴田先生はいわゆる苦学生であったが、それは明治時代末期から大正初期にかけてのそれであるから、飽食の現在からはまさしく想像を絶する生活であった。

ところが柴田先生は、これを苦と感ずることがなかった。むしろ、清しい汗を流して日本の行く末をみつめる充実した時間を、ひとり体験している特権的な自由として学に挑む日々を誇り高く謳歌していたのである。

そんな柴田先生だから、闘魂の暮らしが与える素晴らしい精神の高揚を自分だけではなく、多くの人々に伝えたいと考えることは、虚勢のない自然な意識であつたろう。

柴田先生は前例がないことを怖れなかった。

教科書もノートも買えない苦学生が、ときの大物国士たちを領かせ、やがては大志を抱く青年たちの指導者となり学舎を立ち上げるなど、日本の近代史に前例がなかった。

前例がないことへの挑戦と価値を人々に確信させた柴田徳次郎の輝きとは、あまね遍く広い博愛的な闘魂であり、決して狭量な他罰主

義の自称愛国者からは生まれたい、草民万人の手本となる人間への深い愛情から放たれていたものであると思う。

そして、柴田先生の個性溢れる光彩は、いまでも私たちの行くべき道の先を照らしてくれる。私たちがその光源に気がつきさえすれば。

無論、人間ひとりの力で民族の精神文化を回復する大事は臨めない。

しかし、現在の日本人が、柴田先生の生き方を知ることにより、窮屈で不公平な今の日本社会を建て直そうという心眼を開くことができれば、各々個人の想いは大志となり得るはずである。

本書は、不世出の偉人柴田徳次郎を再発見し、無常観に囚われる現在の日本人に、温かい光を取り戻すための指針になると信じている。

付言すれば、本書は私が扇動した政治的プロパガンダの類になく、本書の作者・田中健介氏が、もともと御自身の主題として柴田徳次郎を取り上げ「週刊実話」誌に掲載されていた伝記に、同氏が新たに加筆されたものである。

愚直なまでに虚飾のない、それでいて見事に柴田先生の人生を浮かび上がらせてくれた田中氏の圧倒的な筆力に感銘を受けた私は「柴田の不肖の弟子」として、恥も外聞もなく同氏のもとに押しかけ、ぜひとも本書を世に送り出して頂きたいと無理難題を申し上げた次第である。

柴田徳次郎がいなければ邂逅することもなかったかもしれぬ同氏と私の合縁奇縁も、未だ修行の足りない私に対して柴田先生が降ろした天命であるかのようにである。

本書を手にした多くの人々が、柴田先生の生き方を通じていまの日本を見直す契機として頂ければ幸甚である。

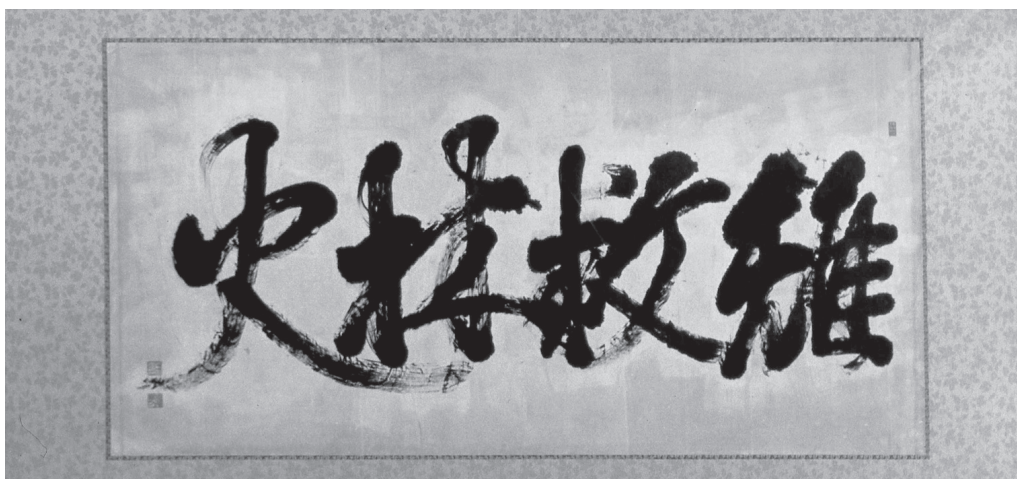
私には、師からの叱正として身を縮めることになる本書ではあるのだが。

終りにあたり、本書の編集に御協力をいただいた松本州弘氏を始め、三友社の安達氏並びに森田昭彦氏、国士館の丸谷智脩、平木茂、鶴見保、宮川英之の編集委員の方々に感謝申し上げます。



国士館創立者

正四位等 経済学博士 柴田徳次郎先生



扁額「雉救林火」

大講堂に懸出されている

創立者 柴田徳次郎筆

「大きな山火事を一羽の雉きが一所懸命消そうとしている。それが実に真剣であつたので仏が助けてくれた」という意味で、仏教書「大智度論」の一説と伝えられる。

創立者柴田徳次郎は、昭和20年の戦災によつて校舎のほとんどが焼失してしまつた国士館の復興に臨んで、その決意を示しこれを揮毫した。苦難の時をなんとか乗り切ろうと努力する創立者柴田徳次郎の強い意志が窺える。

後に、緒方竹虎など多くの支援者達によつて国士館の復興が成され、現在に至っている。

雉救林火

昔野火烧林。

林中有一雉勲身自力。

飛入水中漬其毛羽來滅大火。

火大水少往來疲乏不以爲苦。

是時天帝釋來問之言。

汝作何等。

答曰我救此林愍衆生故。

此林蔭育處廣清涼快樂。

我諸種類及諸宗親并諸衆生皆依仰此。

我有身力云何懈怠而不救之。

天帝問言。汝乃精勲當至幾時。

雉言。以死爲期。

天帝言。汝心雖爾誰證知者。

卽自立誓。我心至誠信不虛者火卽當滅。

是時淨居天。知菩薩弘誓。

卽爲滅火。

（大智度論第十六卷）

雉林火を救う

昔、野火、林を焼く、林中に一の雉有りて、身自ら力を勲めて飛んで水中に入り、其羽毛を漬け、來りて大火を滅す。火は大に水は少し、往來して疲乏するも、以つて苦と爲さず。是時、天帝釋、來りて之に問うて言はく、「汝は何等をか作す」と。答へて言はく、「我此林を救ふことは、衆生を愍むが故なり。此林は蔭育の處にして廣く、清涼快樂なり。我諸の種類及び諸の宗親并に諸の衆生は、皆此に依り仰ぐ、我は身力有り、云何か懈怠して之を救はざらん」と。天帝問うて言はく、「汝は乃ち精勲して、當に幾時にか至るべき」と。雉言はく、「死を以て期と爲す」と。天帝言はく、「汝が心は爾なりと雖も、誰か證知する者ぞ」と。卽ち自ら誓を立つらく、「我心の至誠、信にして、虚しからずんば、火は卽ち當に滅すべし」と。是時、淨居天は菩薩の弘誓を知りて卽ち爲に火を滅す。

（大智度論第十六卷）

創立時の功労者

柴田徳次郎

渡辺
海旭

花田
半助



徳富
蘇峰

渋沢
栄一

野田卯太郎

頭山
満

筆 自 の 生 先 長 館

親見勤筆
筆後歩素

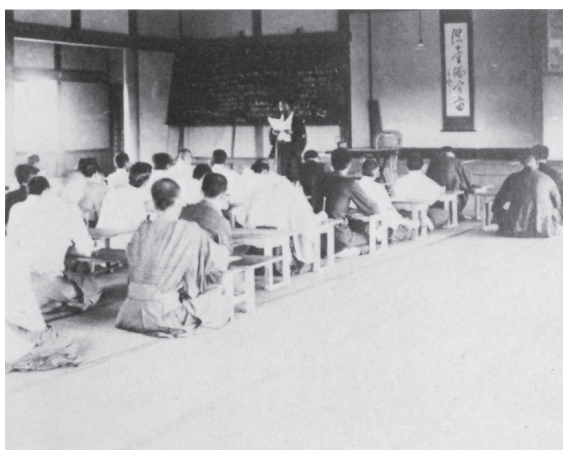
誠意
勤勞
見識
気魄

任事力速
たみなるのほかに
つたふとえん
よきことよ
いふ言も
徳

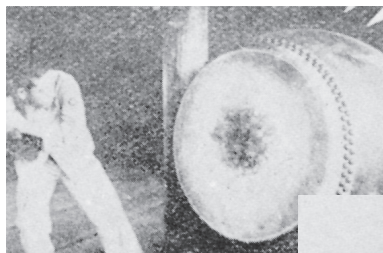
たゆみなくのぼらばついにふみこえん
よし須弥山のいかに高くも



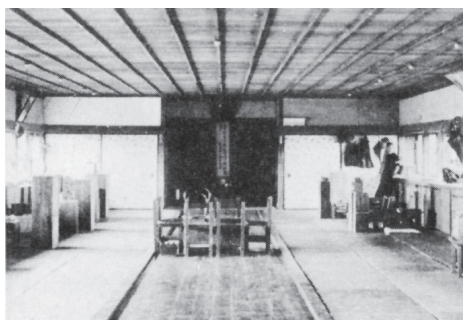
国士館大講堂の落成式（大正8年）



国士館義塾当時の講義風景と大講堂（大正8年）



大太鼓



回天寮



日本一の大国旗



国士館中学校の校門



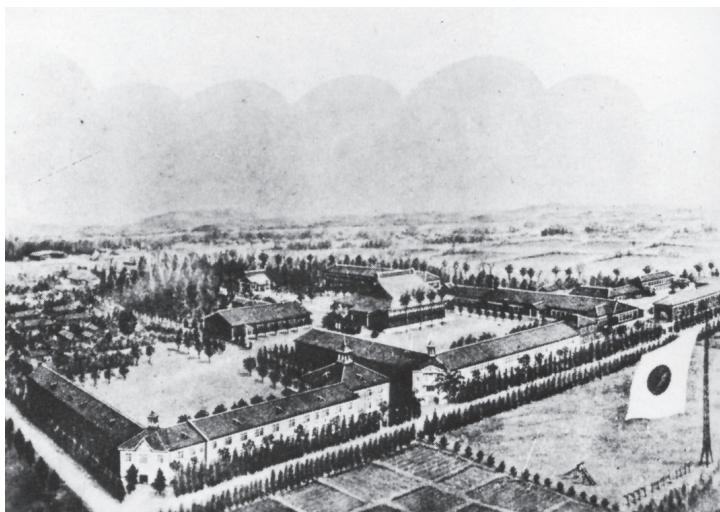
大民同人の方々と塾生（国士館大講堂にて）

像の左側が柴田館長、中央イスの右側・頭山満先生、左側・永井柳太郎先生



國士館専門學校創立維持委員會

国士館の全景
(大正8年)



国士神社



校舎



柴田館長
乗馬の勇姿
(昭和31年)



左側より 野田俊作・柴田館長・松野鶴平の各氏



緒方竹虎先生（写真）について話される館長先生



慈愛あふれる式辞（昭和 36 年）

国士館歌

作詞 柴田徳次郎
作曲 東儀鉄笛
編曲 石川太郎

一、霧^{きり}わけ昇^{のぼ}る陽^ひを仰^{あふ}ぎ
梢^{こづえ}に高^{たか}き月^{つき}を浴^あび

皇^{みくに}国^{くに}に殉^{ゆる}す大^{まさ}丈^{すら}夫^をの
こ^{むさし}こ^の武^{こく}蔵^し野^{かん}の国^{こく}士^し館^{かん}

二、松^{しょう}陰^{ういん}の祠^しに節^{せつ}を磨^まし
豪^{ごう}徳^{とく}の鐘^{かね}氣^きを澄^{すま}す

朝^{あさ}な夕^{ゆう}なにつく呼^い吸^きは
富^ふ嶽^{がく}嵐^{おろ}しの天^{てん}の風^{かせ}

三、区^く々^く現^う身^つの粗^{あら}薪^{まき}に
大^{だい}覚^{かく}の火^ひを打^うち点^{とも}し

三^{さん}世^{せい}十^{じゅう}方^{ほう}焼^やき尽^{つく}す

至^し心^{しん}の焰^ほあふらばや

至^し心^{しん}の焰^ほあふらばや

第 1 章

明治時代の在野の巨人・

頭山満翁を「同郷の福岡の出身です」と訪れた異装の少年は、

「自分は牛乳配達しつつ学校に

通っているが、牛乳を取ってほしい」と堂々と訴えた。

「ホッホッホ」と笑った頭山翁は

これに応じるが、この少年こそ、

後の国士舘大学の創立者・

柴田徳次郎だった。

頭山満の口をこじあけた少年

天下の豪傑としてその名を知られ、無冠の帝王として歴代の政府に睨みをきかせた巨人、頭山満翁は明治の末年、赤坂の霊南坂をのぼりつめ右に曲がった路地の突き当たりに居を構えていた。詳しくは東京市赤坂区霊南坂町26番地、現在の米国大使館の裏手、ホテルオークラ別館のちょうどはす向かいにあたる。

板塀をめぐらせた武家屋敷風の二階家だが、頭山翁みずから墨書した表札は、右側の門柱のはるか上部に掲げられている。何度掛けかえても頭山翁の信奉者が持ち去るからである。

浪人の王者の住まいにふさわしく、この家は終日、来客のとだえることがない。代議士や政客が足しげくかよえば、陸海軍の将校も出入りする。

肩をいからした壮士風の男たちが玄関を出たかと思えば、すれ違いに髻を結った相撲取りが入ってくる。座敷には芸者が科をつくって坐っているかたわらに、謹厳そうな教育者が端座している。宗教家もいればヤマ師もいる。アジア各国の亡命革命家の姿を目にすることもめずらしくない。ともかく、社会のありとあらゆる種類の人々がおしかけてくるのだ。

こうした階下の混雑をしりめに主人の頭山翁は、二階で終日黙座している。来客たちは、翁をひと目見て挨拶し、階下において女中や書生が運ぶ茶菓を口にしながら、見知らぬ者同士で勝手な話をして満足げに帰ってゆくのである。

明治40年の暮れのある晩のこと、そんな客たちも引き上げて、静まり返った頭山家の門を叩く少年がいた。

学生服に革靴をはいた中学生だが、革靴は中古の兵隊靴をクツ墨で黒く染めたもので、履き古してぱっくりと口をあけたところを針金でぐるぐると結わえてある。学生服も左右の胸にポケットのある、市電の車掌の制服に金ボタンをつけたものだ。ひと目で古着とわかった。

そんな異装の中学生が、応対に出た書生に、「頭山先生に是非お目にかかりたい」と、懇願した。聞けば、頭山翁と同郷の福岡出身の苦学生で、牛乳配達をしながら芝中学に通っているという。翁と同郷という言葉に、とりあえず頭山翁に取り次ぐと、「二階に上げろ」という。

少年が頭山翁の居間に入ると、翁は福岡特産の郡山染の鼠色の羽織をまとい、火鉢に手をかざしながら端座していた。

頭山の言葉は生粋の福岡弁でなく、福岡と土佐と東京の言葉が混じった独特のもので、「豪傑弁」と名づけられていたが、かしこまる少年を「そち」とも「そっち」ともつかぬ言葉で呼び、「何の用じゃ」とたずねた。

少年は、福岡から十五歳で上京し、新聞、牛乳を配達しながら中学に通う境遇を縷々打ち明け、「牛乳を取っていただきたい」と懇願した。

少年の話にじっと耳を傾けていた頭山翁は、「牛乳は滋養のため飲んでおるが、ほかから取っておるようじゃ。かわりにゼニをやるう」といった。少年は臆さずこう話した。

「先生は滋養とおっしゃるが、私は生きるか死ぬかです。私はいま中学生ですが、大学までいく考えです。ゼニをいただきましたも雨溜りの水のように、長く続きません。少なくとも泉のように、ぜひ牛乳を飲んでください」

頭山翁は「ホッホッ」と笑って、それには応じず、「また来い」と、静かに言った。

数日後の日曜日の昼間、少年は飛白かすりの着物に袴をつけて再び頭山邸を訪問した。階下は来客で混雑していたが、二階に招かれた。少年の顔を見るなり用件を察した頭山翁は、手を叩いて女中を呼び「ミネを呼べ」といった。ほどなく年配の婦人が来て、「何の御用ですな」と翁にきいた。頭山夫人の峯尾である。すると頭山翁は4本の指を握りこみ親指だけを少年の方に向けると、「これの牛乳をとってやれ」といった。

婦人はいぶかしそうな顔で、「なんですな、牛乳ですな、牛乳なら四谷の永松からとっております……」

そうこたえる婦人に、翁は「取ってやれ」と繰り返し命じた。婦人が、「どちらからですか」と、たずねると、すかさず少年が、「今度は私の牛乳を取ってください」と声をあげた。その翌々日から頭山家には、少年の牛乳が毎朝5合ずつ配達されることになった。

この少年こそ、それからわずか10年後に、徒手空拳で東京・麻布に国士館義塾という私塾を興し、のちに国士館大学の創立者・総長となる柴田徳次郎だったのである。

頭山翁は、冗談まじりに「柴田はひどいヤツ、俺の口を無理にコジ開けて牛乳を飲みました」と語ったが、この日以来、頭山翁は

生涯にわたって柴田徳次郎を支援し、国士館の発展に大きく寄与することになる。

柴田は後に「母により神を信じ、頭山翁に依って大人君子あるを信じ、日本帝国に依りて宇内に真に愛すべき国家あるを知れり」と墨書している。

勉学へ燃えるような思い

没落した家庭

国士館大学創立者の柴田徳次郎は明治23年12月20日、福岡県那珂郡別所村（現、筑紫郡那珂川村別所）に柴田宅兵衛・フテの4男として生まれた。

父の旧姓は高木久太郎。少年時代に武家養子に行き柴田宅兵衛と改名し、明治維新の後に帰農、村長をつとめていた。根っからの保守党びいきで、自由党を政敵として羽振りをきかせていた。

ところが明治33年、伊藤博文が自由党を政友会と改称し総裁に就任容認すると、政情が一変する。それまで「火つけ強盗自由党」とよばれていた旧自由党の政友会が大躍進し、この山村でも保守党は大敗して父親は村長を辞め、柴田家から活気が失せた。

加えて、徳次郎が高等小学校2年に進級した12歳の時、父親が友人の借金の連帯保証人になったのが災いして差し押さえを受け、破産の悲劇に見舞われる。

親の援助による中学進学を断念した柴田は、高等小学校の残り3年間で、法律の講義録を理解する学力を養おうと決意し、自宅から2里半（10キロ）離れた早良郡の東入部高等小学校の宿直室に寝泊りし、草場作三郎という教師から、国語、漢文の補習を受けることとなる。草場は師範学校を出たての教師で宿直室に寝泊りしていたが、柴田を親身に指導した。

破産した柴田家には、徳次郎に教科書を買わせる余裕すらなかった。徳次郎は4年の教科書を草場から借りて、3年の3学期にはすべて筆写し、必要なものは絵まで書き込んだ。

草場は、夕食前に「おい柴田、豆腐を買って来い」という調子で、柴田をしばしば買い物にやらせたが、柴田も理解の行かぬ個所に出くわすと、昼休みに教員室に押しかけて草場に質問した。

草場は「よく勉強する」といって柴田の頭を撫で、合点のゆくまで教えた。

勉強ばかりでなく、放課後には「葛湯」をつくって飲ませたり、柴田が拾ってきた子犬の怪我に絆創膏を貼ってやるなど、柴田を実の弟のように可愛がった。

柴田はのちに草場を「実に一点の邪心も無い、清い気高い先生であった」と回想している。草場の温情により人並み以上の学力を身につけて高等小学校を卒業した柴田は、中学進学の学費を稼ぐため、鞍手郡菅牟田の貝島炭鉱病院に薬局生として奉公する。月給は6円、食事代や雑費を差し引いても月4円の貯金ができる。半年働けば24円、上京の旅費だけは十分稼ぎ出せる。

さいわいこの病院に、東京遊学から帰った赤星という20歳ぐらいの青年が勤務していた。親切な男で柴田にナショナルリーダーを教科書にして毎晩英語の手ほどきをしてくれた。その赤星が「東京には正則英語という学校があり、そこに通えば英語はすぐに上達する」と教えてくれた。

上京にあたり、10歳年上の姉が、羽織袴から布団にいたるまで手織り手縫いで仕立てて柴田を見送った。

明治39年2月8日、故郷を発った柴田は、博多から新橋まで三日二晩、汽車に乗り通す。呉からは日露戦争に勝って凱旋する兵士と乗り合わせ、停車する駅ごとに万歳、万歳の歓呼に送られて2月11日、紀元節の日に東京へ到着した。

上京して正則英語学校に入学

異相の中学生

東京での寄宿先は、日本大学の法科に通いながら、赤坂山王下にある万朝報販売店の監督をしている次兄の下宿先である。次兄は父方の親族へ養子に入り、高木波次郎といった。

柴田は東京に着いたその夜から、配達員に連れられて京橋弓町の万朝報へ新聞紙を取りに行き、翌日は配達先を教えられ、3日目からは順路帳を頼りに一人で新聞を配達した。

予定通り、神田錦町の正則英語学校に入學し、午前8時から正午まで英語だけ学び、午後6時から9時まで普通科に通った。月給は7円から8円、どんなに節約しても食費に月5円はかかった。残りの金で月謝を払うと残りはゼロに近い。学校への一日2回の往復とも徒歩である。就寝は午後10時過ぎ、起床は午前2時、3時である。

この生活によく慣れたころ、赤坂の新聞販売店が麻布三河台（六本木）の本店に合併されることになった。従業員は10人以上になり、主人に対する不平からストライキが起きた。柴田も不平組に加わり店を出て、芝区三田四国町の国民新聞専売店に移った。

この新聞は日露講和会議のおり、政府の御用新聞と化して東京市民から反感を買い、部数がガタ落ち状態だった。そのため拡張に力を入れ、配達員が10人、15人と隊列を組み、広告を配布しながら、町中を走り回った。柴田も腰に鈴をぶら下げて芝から本郷あたりまで駆け回った。学校は夏休み中で授業に支障はなかったが、夏期講習には参加できなかった。

秋口に入ってもこれが続いたため、今度は京橋の中央新聞本社配達員に転職する。ここでは、夜遅く本社に行き、深夜の12時前後に刷り上げる新聞を待つて配達に出ればよかった。時間的な余裕はあったが、ともかく配達区域が広いのに閉口した。

京橋の本社を出て、丸の内から神田を抜け、九段坂を上下して飯田橋から牛込に入り、東五軒町、小川町、江戸川橋、山吹町を経て、矢来から二十騎町、さらに四谷坂下町から市ヶ谷本村町の陸軍士官学校（現、防衛省）あたりに及ぶのだ。士官学校近くでは睡魔におそれ意識が朦朧となつてしばしば溝に落ちた。

次に移ったのは赤坂福吉町の新聞販売店で、ここは諸新聞を取り扱う店である。上京の年の一年間はこうして暮れ、明治40年を迎える。

生涯の恩師と友人との出会い

芝中学に編入

4月に芝中学3年の編入試験を受け、合格して正規の中学生になった。芝・増上寺の一隅にあるこの学校は、もと浄土宗の教校だったが、数年前から一般子弟を受け入れ、柴田は4期生にあたった。

芝中学は生徒の服装にはことに厳格で、制服、制帽にゲートルをつけることになっている。海軍ゲートルという白麻の、脇にボタンがついたもので、制帽も天井の張った海軍帽。「芝中の生徒は後ろ姿でわかる」と云われた。

ところが、柴田には制服を買う金がない。仕方なしに夜店に吊るされた市電の車掌の制服を買って、芝中の金ボタンをつけ、制帽は小学生用のもので間に合わせた。靴も中古の兵隊靴を45銭で買い、黒く染めた。

服装検査は毎朝、石腸いしじょうという生徒監が正門に立って目を光らせた。ゲートルのボタンひとつはずれていても厳しく注意した。が、柴田の境遇を知る石腸は異相を黙認した。

柴田は、この中学で生涯の恩師と友人にめぐりあう。

恩師は第三代校長の渡辺海旭である。渡辺は『大正新脩大藏経』87巻を編纂、刊行した仏教学者であり、仏教社会救済事業のさきがけとして、深川に下級労働者保護施設の浄土宗労働共済会を設立した社会運動家でもあった。

渡辺は柴田に援助の手を差しのべ、国士館の理事にも就任して、生涯にわたり国士館に無償で奉仕した。昭和8年、国士館関係者により満州国に鏡泊学園が設立された際には、その初代校長にもなっている。

柴田の生涯の友となったのは、同級生の長谷川良信で、のちに国士館の母体となる青年大民団の同人となり、私塾時代の国士館の教師をつとめた。彼はまた、東京・西巢鴨のスラム街にセツルメント事業のマハヤナ（大乘）学園を設立、さらに、大乘淑徳学園を創設して現在の淑徳学園を築きあげた。

柴田と長谷川は二人して、日露戦争の絵葉書を買うため神保町まで出かけ、芝から神田までの酒屋をすべて飲み歩いたと伝えら

れる。そのほか、同級生の山田了然、鮎川巖、樹下信雄なども後年、国士館に関係した。

芝中英語教師の下位春吉は、その後イタリアに渡り、熱血の詩人ダヌンチオのフィウメ占領に参加、ムッソリーニと親交を結び日本人として唯一ファシスタ党に入党している。帰国後、講演や執筆活動を通じてイタリー・ファシスタ革命の真相を公にした異色の人物だが、その下位も国士館で教鞭をとっている。

第 2 章

新聞配達から牛乳配達に転じた
柴田だが腐りかけた牛乳を卸され
窮地に陥る。

その柴田を高橋菊蔵が援助した。

赤坂の急坂は荷車を牽く

柴田を苦しめた。

この艱難辛苦は柴田の不屈の闘魂を
養うこととなる。そして牛乳の勧誘を

口実に同郷名士を訪ねた柴田は、

生涯の恩人となる野田大塊に

出会ったのだった。

第 3 章

旧制中学の学生時代の柴田は、
苦学生という表現がぴったりの
日々だった。

睡眠は毎日3時間ほどで、

食事は飯に塩をふりかけるのみだ。

授業料と生活費はすべて、

牛乳配達などでまかった。

そして、無事、名門の芝中学を卒業する。

柴田はその頃から精神衰弱に陥り、
自殺を決意するに至る。

第 4 章

間一髪、自殺を思いとどめ、

菩薩心に目覚めた柴田は

「思いやり会」を設立。真っ先に

頭山翁を引き込む。

また、早大筑前学生会での

破天荒な自己紹介をきっかけに

中野正剛らとも知り合い、

在学中に多くの名士を歴訪して

人間形成の資とした。

そして、総理大臣在任中の早大総長、

大隈重信を訪問する。

第 5 章

先輩・名士の訪問は

柴田の人格と人脈を形成した。

早大の教授永井柳太郎は

柴田の鋭鋒に破顔一笑し

「思いやり会」に入会する。

また謀略将軍と名高い明石元次郎に

深夜の訪問を許された柴田は生涯に

渡る教訓を得た。

そして大正2年、思いやり会を発展し、

武道と日本精神を骨子とした

青年大民団を発表する。

第 6 章

ともに気性の激しい柴田と中野は、
青年大民団の発会式で激突。

当時、政治青年の宴席での衝突は
日常茶飯事だったが、

中野の記憶に残るものとなる。

後日、出会った二人は

『ヤア』『ヤア』と挨拶し

以後30年の親交が始まった。

その幕を閉じたのは昭和18年。

東郷独裁政権への

中野の壮絶な諫死であった。

第 7 章

青年大民団の同志は、

頭山翁の紹介も加わり拡大した。

中でも柴田の親友、長谷川による社会

奉仕と慈愛の精神は、

その活動に大きく影響する。

大正2年、柴田は、中国大陸を富と

貧困の混在を目の当たりにし、

新たな世界観をもつのだった。

第 8 章

砲撃戦で南京に上陸できなかった

柴田は、武漢三鎮を巡遊した。そこで

中国民衆の貧窮を目にした

柴田の胸中にアジア解放の使命感が

沸々と湧きあがる。

大正4年、早大を卒業した柴田は

就職の斡旋も断り、新天地を求め

満州に渡るのだった。

第 9 章

柴田は大連で多くの同志を獲得した。

そこで出会った原田政治は

柴田の忠告に感銘し、

大学進学を目指し東京へ向かう。

大民団員となった原田は

後に歴史の裏面で活躍する道を

選んでいく。

一方、中国大陸から

日本を捉え直す目的を遂げた

柴田は大正5年に帰国。

以後、大民団の活動に

専念するのだった。

第 10 章

大正5年、中国大陆から帰国した
柴田は、大民団の活動に

専念していたが、

おりから活発化した

日本でのインド独立運動の

志士問題にかかわることになる。

東京で独立を画策していた

インド人ボースらの国外退去を

取り消す努力をしていた

黒幕たちに加わったのだ。

第 11 章

学長を巡る争いに端を發した

早稲田騒動。

現学長天野の秘書の要請を受け、

柴田はじめ大民団に所属する

早大生らは革新団を結成し

学校改革を推進する。

この空前の学園紛争は

柴田ら青年大民団同志に

国士館創設のきっかけをもたらした。

第 12 章

早稲田騒動をきっかけに

柴田は自らの手で

理想の教育を行おうと決意する。

吉田松陰の松下村塾に理想像を置き

大正6年に開學した国士館義塾では

「育英養材」の使命感に基づく

熱い講義が繰り広げられた。

その建学の精神は柴田の遺書

「国士館は武道に始まり武道に終わる」

の一言に凝縮されている。

尚、柴田徳次郎伝は1章から12章までありますが、紙面の都合上、第1章まで掲載することに致しました。

あとがき

田中健介

かつて、日本中の大学に学園紛争の嵐が吹きすさんだ昭和四十年代の初め、当時、日本大学の会頭として日大を世界最大規模の総合大学に育てあげた古田重二郎は、国士館大学の教育を評してこう語った。

「大学生だって国士館を見れば良くわかる。色んな批判はあるが、柴田学長の厳しい指導によって全学生の整然たる規律、秩序は驚嘆するばかりで、若さと希望に輝いている。青年は純粹だから、教えればこうなるのである。国士館は一番いい見本だと思っている。そういう意味で、私は今の青年を見くびることは一つもない。ただおしえてやってほしい。しかし、教えるには命がけで教えるのでなければならぬ。大学騒動のひどいところは、大抵責任者が、逡巡しているから、泥沼の底なしになったといわれている。各大学が国士館の柴田学長のような気持ちでやれば、私にはどうにでもなると思う」

たしかに、戦後の教育界において、柴田徳次郎ほどの信念をもって、学生を厳しく指導した教育者はいない。それは、戦後の日本にあった一つの「奇跡」であったと称しても決して過言ではあるまい。

柴田徳次郎の、この「厳しい指導」こそ、国士館の真髄であり、祖国の歴史と道統を讃えることすら「反動」と目された戦後社会の風潮に敢然と抗し、国を愛する気魄と信念を貫いて学生を訓育し、誠意、勤労、見識、気魄の国士館精神を宿した幾多の人材を世に送り出した。それゆえにこそ、国士館は左翼勢力の標的となり、反動教育とのいわれなき批判を被ったのである。もっとも柴田は、そうした批判をいささかも意に介すことなく、自己の所信にしたがい不屈の信念をもって学生を訓育し、国士館教育の本道を邁進して倦むことがなかった。

柴田は生前、「私の国士館教育は、むしろ天の与えた使命だと思っている」と語った。柴田徳次郎ならではの言ではあるが、この言葉には、それを裏付けて余りあるまさに血の滲むような労苦と実践の積み重ねがあった。柴田の不屈の信念は、不断の読書、体験、反省によって養われたものに相違はなかるうが、少年時代の想像を絶する刻苦の体験によって培われたものであることも見逃せぬ事実であろう。

昭和二十年三月、創立三十年目にして国士館は戦火により講堂を残して灰燼に帰した。このとき柴田の勇猛心をふるいたさせた

のは、仏典の『大智度論』にある、「雉、林火を救う」のたとえであった。

「昔、野火林を焼く、林に一雉あり、水を以って林に注ぎ、往返やまず。時に天帝きたり問うていわく、何をかなす。答えていわく、『我れ衆生を愍むが故にこの林を救わんと欲す。この林、蔭影清涼、我が諸の種類眷属ことごとく依仰す。我れ身力あり、いかんぞ怠てこれを救わざる』」

天帝、問いていわく、汝、精勤幾時に至るべきや。答えていわく『死を以って期とせん』、

天帝いわく、汝が心爾といえども、誰かこれを証知するや。いわく、すなわち『自ら誓いを立てわが心、至誠むなしからずんば火すなわち当に滅すべし』と。

この時、淨居天、雉の仏誓を知り、すなわち為に火を滅す」（智度論十六、経律異相四十八、義夫六帖二十三）

柴田は椽大の筆を執り、一畳ほどの紙に「雉救林火」と大書して、これを焼け残った大講堂の壁間に掲げ、自らを励まして自己の指針とした。柴田はいふ――

「大きな山火事で広大な森林が猛烈な勢いで燃え出した。それを一羽の雉が気狂いのように水を汲んできて消しておる。それを天上から御覧になった神々が不思議に思われ、雉に向かって『お前は何をしているのか』と尋ねられた。すると雉は『この森には長年月、私共の一族達が育てられ、住まわせてもらっている。それが大火事になりましたから、衆生済度のため一生懸命消しておるのです』」

神々はあきれて『たった一人でか、いつまでかかって消すのか』。雉『死をもって期とす、死ぬまでかかって消します』と答えた。それが実に真剣であったので、神々が『これは本気だ、皆で助けてやろう』と相談一決、お助け下さったので、さすがの大火も消しとめられたという『雉救林火』（キジ林火を救う）の譬え話を思い出し、『そうだ、これだ！』と感じて精神をこめて墨をすり、大きな紙一ぱいに『雉救林火』と書いて表具し、講堂にかけた」

「雉林火を救う」の精神は、焦土の中から国士館を再建した柴田徳次郎の指針であったとも言えるであろう。

一代の国士、柴田徳次郎先生の国士館創立に至るまでの辛苦を描いたこの小伝のサブタイトルに、「雉林火を救う」とつけたのは、柴田精神の継承者、国士館大学武道德育研究所の野木大義教授の御助言によるものである。